



## 松本 教夫さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：9月2日

### 明るく前を向いて、長生きしよう

現在、福島市のまちなかに立つ森合仮設住宅に、ご夫妻と避難の時もずっと一緒だった97才になる義母の3人で暮らしていらっしゃいます。

「時間が経つほど浪江には帰れないかもしれないと思う。家業再開も難しいけれど、請戸で200人の方が亡くなったことに比べれば、何てことはない。それにしても鮭とほっき貝は惜しいなあ」と教夫さんが笑う傍で、一緒に微笑んでいる妻のひろ子さん。ご夫妻の気丈な笑顔が印象的でした。



▲教夫さんと一緒に、たくさんお話をしてくださった妻のひろ子さん

■人とつながっていること、話  
しができることが一番です  
私どもは建築資材店をやっ  
ており、あの日は自宅隣の店の棚  
が大きく揺れ、店番をしていた  
妻と嫁、配達から帰って来た息  
子や従業員も大騒ぎになりました  
た。余震が何度もあったし避難  
所も寒いだろうと思ひ、暗闇の  
中、石油ストーブや湯たんぽで  
暖を取りながら、私たちと隣に  
住む息子夫婦と孫2人の家族6

人で過ごしました。

翌朝、消防団員だった息子が  
ら避難を告げられ、妻の母が住  
む葛尾村に向かいました。電気  
も水も、食料もあつたので助か  
りました。3月21日朝、村の人  
や自衛隊の案内で、義母と私  
ちは役場のマイクロバスに乗っ  
て会津の柳津町に集団避難をし  
ました。町の避難所には床暖房  
があつて暖かでしたが、既に7、  
80人が避難。浪江町民がずっと  
世話になるわけにはいかないだ  
ろうと、東京・町田市に住む妻  
の姉を頼りました。先に世話に  
なつていた息子に会津まで迎え  
に来て貰いましたが、ガソリン  
の配給を受けながらの大変な道  
のりだったそうです。

役場からの連絡で、5月14日  
に猪苗代町中ノ沢温泉の花見屋  
に移りました。浪江町の方々が  
大勢避難されており、顔見知り  
が多くて毎日賑やかでしたが、  
どんな仮設住宅などに移られ、  
9月5日に離れる時には私たち  
が最後でした。寂しかったです  
よ。

■住むところやこれからのこと  
は、今から考えます

ひろさんは当時を振り返り、  
「東京での避難が一番辛かった

です。あの頃に見たチェルノブ  
イリの番組で、故郷に帰っちゃ  
ならない人たちのことを知って  
ショックでした。着の身着の  
ままでお金もなく、大切なも  
のがすべて崩れてしまい、落  
し穴に落ちたような気持ちで  
した。砂を噛むようなごはん  
で、こういうことだと知りまし  
たよ。」  
中ノ沢温泉に避難していた4  
月初め頃に、息子と一緒に浪江  
の自宅に通帳や仕事の書類を取  
りに行きました。5年前に銘木  
や漆喰にこだわって建てた我が  
家や植木、息子たちが住んでい  
た古い家はネズミに荒らされ、  
酷い有様でした。  
「息子の将来を思って、土地  
や店舗など資産に投資をし、お  
客様とのつながりも築いて来た  
のに、生きてきた証が無くなつ  
てしまいました。新しい生活と  
言われても、限られた保障では  
どうしようもありません。」と  
ひろ子さん。  
現在、森合仮設住宅15世帯の  
自治会長を勤めています。み  
んなで仲良く暮らすことが一番  
です。私たちは公営住宅にでも入  
れば有り難い。国や町には手  
厚い補償と再建のための良案を  
望んでいます。

# 浪江の こころ通信



・第28号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。



## 再取材シリーズ 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から2年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第28号」への感想をお寄せください。  
【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243(22)4218





## 田中 研二さん(川添)

取材者：市民ネットワークわくわくプロジェクト土浦 日辻  
取材日：9月6日、8日

### 忘れずにあきらめずに伝えて生きよう

私(田中さん)は、震災当時、警備会社に務めており、当日は福島第二原発で勤務中であつた。現場に居るにも関わらず情報はなく、電話も繋がらない中、家族が一体どうしているのかさえわからず、無事で居てくれと願いながら3月15日まで、勤め先から出ることが出来なかった。いざ避難しようと思っても、浪江町内の実家や親戚も避難を強いられ頼ることが出来なかった。妻の妹夫婦が土浦から家族を迎えに来てくれ、私より先に避難したが、私もまた、土浦に来てたくさんの方々に支援や励ましをいただきながら生活を、現在に至っている。



▲現在の私たち



▲妻の妹夫婦と私たち

着のみ着のまま、土浦に来ました。当時中学を卒業したばかりの長男と小学4年生の長女も履いていた靴を脱ぐことも無いまま避難し、土浦にいる妻の妹夫婦がわざわざ迎えに来てくれるまでなすすべもなく呆然と避難所を転々としなければならませんでした。「あの時、一体なにが起こったのでしょうか?」私は福島第二原発で警備を担当していました。何事も無いこと、「無事であること」を維持するのが私の仕事です。しかし、あの大きな地震の後、警報が鳴り響く中、振り返ると見たこと

もないどす黒い激しい波が建物に迫っていました。家族の無事も確認できずただ祈りながら3月15日の退去命令まで福島第二原発で勤務をしていました。私の実家も兄弟も皆近くに住んでいましたので、皆が避難を強いられました。妻や子供達は避難所で過ごし土浦で会うことにしました。土浦では近所の方々、長女が通うことになった小学校の体育着やランドセルを集めてきてくれました。長男は公立高校への編入がすぐに決まり、校長先生はじめPTAの方々OBに掛け合つて、制服や指定のジャ

ジまで揃えてくださいました。新学期からすぐに子供たちが学校に通えたことは、私たち夫婦にとつても何よりでした。ただ長男はスポーツ推薦で、高校でも活躍が期待されていたことや長女も陸上競技で町の代表を目指し頑張っていたにもかかわらず、それを断念せざるを得なかったのは辛かったです。見知らぬ土地で友人も居ない中、頑張っていましたし、友人にも恵まれました。そして、あつという間に2年半が過ぎ、長男は高校3年に、長女は中学1年になりました。断念せざるを得なかった夢とはまた別の夢に向かい、長男は「地元に戻って人を助ける仕事がいい」と今、頑張っています。多感な思春期にたくさんの辛い思いをさせてしまいました。それでも、土浦に来て、周囲の皆さんからいただいた温かいお心づかいを忘れません。今後、先行きが見えませんが、子供たちの進学や就職の希望を出来る限り尊重した生活をしたいと考えています。あの辛い経験を忘れずに、そして一人でも多くの方に伝えながら浪江にいつか戻れることを目標に頑張つて生活していこうと思つています。



## 山本みよ子さん(室原)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田  
取材日：9月5日

### 皆さんから元気ももらいながら

山本みよ子さんは、震災後、山形県天童市にご夫婦お二人で暮らしています。夫の勝さんは、現在、単身赴任中とのこと。住んでいる借り上げ住宅の近所の方から、野菜や果物をいただいたりお茶のみや観光に誘っていただいたりと、気兼ねないお付き合いの中で人のつながりに感謝しているそうです。



▲遊びにきていたお孫さん、大誠くん(4歳)、袖樹ちゃん(2歳)、即大くん(1歳)と一緒に

浪江は、山に近く海に近く災害も少なく住んでいて最高の場所だったので、震災時、初めは揺れもすぐに収まるだろうと思つていました。ですが、なかなか揺れが止まらず、機械も倒れてきて会社の外に避難しました。まさかあれだけの地震だとは思いませんでした。その後、まず実家へ避難し、翌朝警報が鳴り、4家族11人で、娘の住んでいる山形県山形市に避難しました。町の他の皆さんも大人数で避難したと聞いています。娘の夫と

も相談し、当分は浪江町に帰れないのではということ、すぐこの場所を探してもらいました。孫・ゆずきを出産するため、山形から浪江に帰省していた娘が、震災1週間前に山形に戻つたところで、もし家にいたらと思うと…本当に無事でよかったです。今は庭に畑があり、孫の楽しみにと思つてトマトを作つたり、花を植えたりしています。米農家もしていましたので、浪江で作つた自分のお米も美味しかったことを思い出しますね。時間を見つけては、小物を作つており、山形の復興支援員の皆さんが企画した交流会で教わつた「エツグアート」も自分なりにアレンジして作ってみました。あとは、孫の面倒をみることに忙しいです。浪江にいた時はこんなに孫と接することはできませんでしたが、住んでいた室原地区は線量が高い地域なのですが、地区の皆さんも諦めきれない故郷への思いを持っていてと思います。ですが、実際に帰るとなると、家はあつても住める状態ではなく、原発の状況もまだわからない

で、最近はまだ一時帰宅できないでいます。除染しなければ帰れません。雨が降ればいちごっこのような状態で現実はいと惨状です。それでも何十年後にも浪江の家を見せられるといふと思つています。また、浪江町自宅の隣組で毎年、柳津の虚空蔵様にお参りに行つており、これからも小さくはないようにといふことになり、来月福島市に集まる予定です。山形でも、娘家族の友達のお母さん、その友達の方など様々なつながりで物資を衣装箱ごといただくなど、自分がそうならたらくまでできるだろうかと思つて、一緒に面倒を見てもらいました。一緒に避難した妹、孫、娘夫婦、近所の方など、多くの方の支えがあることに感謝しています。人とのつながりや関わりが一番大切で心の支えであり、元気をもらっています。浪江町で関わりお会いできない方も多く、この通信を通して感謝の気持ちと「元気です」ということが伝われば幸いです。





## 横山 俊勝さん(立野)

取材者：NPO法人くびき野サポートセンター 竹内  
取材日：9月9日

### いつか、再び家族全員で暮らしたい

『浪江のこころ通信』第1号掲載の横山俊勝さんご家族は、新潟県柏崎市で暮らしています。掲載当時は裏磐梯に避難していたご両親を2011年の末に柏崎に迎え、現在は同じ敷地のアパートに家族が揃いました。「浪江町で暮らしていた時のように、家族全員で同じ家に住みたい」と、横山さんはこれからの目標を話されます。

■成長した子どもたち  
避難当時、小学生だった息子たち、翔琉と拓海は中学生になりました。2人とも柏崎市の生活に慣れ、新しい友だちもできて充実した日々を過ごしています。もともと運動が好きな2人は、こちらに来てからスノーボードなどのウィンタースポーツに興味津々。私もスキーを習い、妻はソフトボールを始めるなど、

■離ればなれの家族が集合  
現在、私たち家族は新潟県の柏崎市で暮らしています。妻の兄夫婦が生活するこの地へ家族や親戚と自主避難した当時、父母と祖父母が福島避難所へ戻り、しばらく家族が離ればなれになってしまいました。今は4人を迎えることができ、私たちが夫婦と3人の子どもたち、両親と祖父母に分かれて同じ敷地のアパートに暮らしています。家族みんなの顔が揃ったことで、改めて家族の大切さを実感。ようやく避難以前の生活リズムが戻ってきたように感じます。

■感謝の気持ち、そしてこれから  
柏崎の人たちには本当に親切にしてもらっています。避難してきた当時、個人で避難者支援をしてくれた「共に育ち合い(愛)サロンむげん」の方や、私たち避難者に積極的に声掛けをしてくれる地元町内会の方たちなど、数えたらきりがありません。しかし、いつかはこの地を離れない、

■新たな生活の中にも楽しみを見つけています。娘の詩乃は今年5歳。今でも浪江町の家のことを鮮明に覚えているようで、大人たちが一時帰宅する際に、「置きっぱなしのおもちゃを、持って来てね」と頼みます。持ち帰ってあげたいのですが、放射線が心配できないところが残念ですね。来年は小学校にあがる娘や、こちらに居場所ができたところある息子たち。  
確実に2年半の月日が流れたことを感じますが、以前と変わらずこれからも子どもたちのことを最優先にしていきたいと思っています。

なくてはならない。今は「仮の住まい」での生活という思いが家族の中にあります。浪江町では、私たちは一つ屋根の下で暮らす大家族でした。再び家族全員で一緒に暮らしたい。この思いを胸に、これからも家族で支え合いながら日々過ごしていきたいと思っています。



▲後列：左から俊行さん(父)、恵美子さん(母)、茂美さん(妻)、俊勝さん  
前列：翔琉くん(長男)、幸男さん(祖父)、詩乃ちゃん(長女)、ミイ子さん(祖母)、拓海くん(次男)



## 保田 武広さん(加倉)

取材者：ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 竹内・三宅  
取材日：9月5日

### 今、私に課せられた使命 ～心のキャッチボールから見えてきたもの～

震災当日は東京虎ノ門にて研修中に被災。息子(大樹さん)は原発に勤務、妻(照江さん)は西病院の看護師だったため、被災後約4日間院内にて勤務し、原発の3号機が爆発する前に避難。家族別々の避難所から東京で再会したものの、再び夫婦と息子は各々の生活へ。

地震発生後、各々は避難し、息子からのメールで無事が確認できました。家族が再会したのは、発生から5日後の東京でした。その後、息子は千葉へ配属。私たち夫婦は家内の実家のある広島県東広島市安芸津町にきました。千葉ではかわいい孫が生まれたばかりで、寝る前には必ず孫の写真を見えています。当初、宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」を思い返して涙をこぼすことがありました。文中に「西に疲れた母あれば 行つてその稲の束を負い」とありますが、私はそのような稲の束を負えな



▲いわきナンバーのマイカーと一緒に

いし、病気の子供の面倒も見られない。死にそうな人に怖がらなくてもいいなんて言えません。ましてや、訴訟や喧嘩をつまらないからやめるではなく、一緒に加わる愚か者です。だから余計に賢治の理想が心に染みて泣くんです。震災の儚さと苦しみがそうさせるのかもしれない。安芸津町は良いところです。東広島市役所の住宅課さんのおかげで大変良い住居をお世話いただき、さらに家具や電化製品なども調達していただきました。仕事ではガス専門会社(孫会社)の係長として勤務しましたが、入社から半年して体調が崩れ、退職しました。その後はボランティア活動をしたり、原発に関する専門的な見地から納得いかないことを東電のコールセンターや資源エネルギー庁などに話したり、新聞を読んで理解できないことをレポートにまとめて(前述の)住宅課さんに読んでもらったりしています。新聞を読むたびに気持ちが沈むと、住宅課の課長補佐さんと女性職員さんのお二人が、私の話をいつも聞いて

てくれます。自分のお仕事を後回しにして、本当に感謝しています。  
このお二人と話すようになって、人の心の重さ、大切さを感じるようになり、自分一人では何もできないということに初めて気づきました。福島で暮らす時には、すぐに怒鳴ることもありませんでしたが、今では人との心のキャッチボールが必要だと思えるようになりました。自分の中で、一步一步進んでいくような気がします。明日を生きる可能性を信じ、子どもたちには震災のことを何らかのメッセージとして残していきたいと思っています。みんなに支えられているから、今度はみんなを支えていく人になりたい。これが私に課せられた使命だと思っています。